

北海道
上富良野町
移住ガイド

空と山と丘のまち
かみふ暮らし
はじめよう



上富良野町で、 十勝岳に抱かれて暮らす。

北海道のほぼ中央、大雪山国立公園の南端に位置する十勝岳連峰を間近に望み、なだらかな丘陵地帯が広がる上富良野町。直線的な山岳景観と、曲線的な丘の風景が紡ぎ出す美しさは唯一無二。美しい景観、良質な食材、多彩なアクティビティなど、季節ごとにいろいろな楽しみを発見できるまちです。あなたの未来に「上富良野町で暮らす」という選択肢を加えてみませんか。

“上富良野町”は、
こんなまち。



遊ぶ

春から秋にかけては、十勝岳連峰への登山はもちろん、フットパス、キャンプ、サイクリングなど、様々なアクティビティが楽しめる。冬は、十勝岳エリアでのバックカントリーが人気。圧雪されたスキー場とは違った、良質なパウダースノーを求めて国内外から多くのスキーヤーが訪れる。町内には個性豊かな6カ所の温泉施設があり、自然を体感できる源泉かけ流しの絶景露天風呂も。また、山岳環境を活かした自転車やヒルクライム競技やトレイルランニングなどのスポーツイベントも開催。



食べる

盆地特有の昼夜の寒暖差と豊かな大地が育む野菜はもとより、国内で唯一、ビールの原料であるホップと二条大麦の両方を栽培。町内産原料のみで作るプレミアムビールが期間限定で販売されるほか、こだわりの素材を使ったクラフトビールやワイン、

暮らす

医療施設は町立病院（救急対応）のほか2カ所の医院と6カ所の歯科医院がある。スーパーやコンビニエンスストア、ドラッグストア、ホームセンターのほか、飲食店も多数あり、田舎ながらも生活するうえでの不便はあまりないといえる。旭川市と富良野市の中間に位置しており、総合病院への通院や買いもの、レジャーなどでの出かけにもアクセス良好。気になる冬の生活では、雪は少なくないながらも、住宅は断熱仕様で、暖房器具も設置。積雪時には、通行に支障がないよう早朝のうちに道路が除雪されている。



どぶろくなども醸造している。年間6万頭も出荷される「かみふらのポーク」は、自慢の逸品。中でも一頭から300gほどしか取れないサガリ（ハラミ）は、町民おなじみの食材。週末には庭先で家族や仲間と七輪を囲む光景が町内のあちこちで見られ、夏の風物詩となっている。

大地の息吹を感じるまち

今もなお、噴煙を上げる十勝岳の火山活動によって生まれた大地に広がる上富良野町と美瑛町。貴重な地形・地質や生態、固有の文化や歴史など、火山がもたらす豊かな地域資源を守り、継承していく取り組みとして、両町では「十勝岳ジオパーク（美瑛・上富良野エリア）構想」を進めている。ジオパークにちなんだツアーやフットパス、ト

レッキング、登山などのイベントのほか、学校の授業にも取り入れるなど、大地に刻まれた自然と人々の営みを発掘・発信していく様々な取り組みを行なっている。



光と色彩あふれるまち

朝、十勝岳連峰から昇る太陽、青い空に浮かぶ白い雲、雨上がりにかかる虹の橋、丘に広がる畑を彩るジャガイモの花、夜空に広がる満天の星など、上富良野町には光と色があふれている。刻々と変化する光の差し方によって描き出される自然の表情、色彩の移ろいを感じるのも、このまちの楽しみ方の一つ。

魅力いっぱいの “上富良野町”

小説「泥流地帯」の舞台になったまち

開拓から30年あまりが過ぎた1926（大正15）年5月24日、十勝岳が噴火。残雪を溶かし、大量の水を含んだ泥流がまちを飲み込む。死者、行方不明者は144人。開墾した美田家、家族までもが泥の海に沈んだ……。膨大な資料を綿密に調べ上げ、泥流体験者の話に耳を傾けるなど、徹底的な取材により、噴火前後の上富良野町をリアルに描き上げた三浦綾子著の小説「泥流地帯」。そのスケールの大きさに、未だ映画化されていないこの作品のフィルム化を目指す取り組みが、いま官民協働で進められている。



原材料のホップも生産ビールが旨いまち

上富良野町と「サッポロビール株式会社」とのつながりは、1926（大正15）年の「直営ホップ園」開設に始まる。町内では、地元産原料のみで作るプレミアムビール「まるごとみふらの」のビアガーデンをはじめ、同社によるビールパーティなど、北海道ならではの爽やかな夏にぴったりのビールイベントを数多く開催。2018年には、町内産のホップを使用したクラフトビールを製造する「忽布古丹（ほつふこたん）醸造株式会社」も創業。上富良野町の風土が醸すビールを味わうのも、ここで暮らす魅力の一つ。



「coffee&bread えん」を営む 野口順平さん・陽世さん夫妻に聞いた まちの魅力



“上富良野 のここが好き”

「coffee&bread えん」の建物の以前の所有者が知人だったという縁で、上富良野町へ移住することになった野口順平さん・陽世さんご夫婦。「周囲に畑が広がるこの地でパンを作り、カフェを営むうえで、地元の食材を使うことはごく自然な流れでした」と語る。

中でも興農社の小麦粉「はるゆたか」は、すべてのパンで使用。2015年の旭川の「北の恵み食ベタルシェ」では、興農社の小麦粉を100%使ったコラボレーション商品「カミフラッグラスク」を手がけ、現在は「フランノマルシェ」でも販売されている。

野菜は地元食材が並ぶ「かみふらの軽トラ市」から購入。採れたてかつ食べごろの味はやはり違うといい、特に、「四釜農園」のミニトマトは、「皮がやわらかく、フルーティな味わいで、ここのものしか考えられない」と陽世さん。時間を見つけては畑にも足を運び、パンのお裾分けをしたり、逆に野菜を山ほどいただいたり。生産者の働く姿を間近に見ることで、「丹誠込めて作られた野菜

に込められるものを作らないと申し訳ない」と思うようになったと順平さんは話します。

移住して6年。冬は地元のお客様が中心で、ときには近所の人が除雪を助けてくれることも。今は休日でもゆっくり過ごす余裕はないものの、「まちなかに買いたいものに行くときなどに山を見て、きれいだなと思うだけで、リフレッシュできる」と順平さん。生産者とのつながりや人のあたたかさ、豊かな自然が日々の暮らしを支えているようです。

PROFILE

野口順平さん・陽世さんご夫婦。順平さんは名古屋出身で陽世さんは帯広出身。2013年に上富良野町に移住。町内里仁地区で「coffee&bread えん」を営む。上富良野は店の多い都市よりも、自分の仕事に集中できる環境だという。



（起業支援）

まちでは、新たな事業を開始する中小企業者等に対して設備投資・運転資金、店舗の賃借料などを支援する「新規開業支援事業補助」制度を設けている。

- 設備投資・運転資金
対象経費の1/2以内、上限150万円
- 家賃補助
対象経費の1/2以内、上限5万円/月12カ月間

（子育て支援）

妊婦健診、乳児家庭全戸訪問などを通じて、保健師、助産師、保育士が、妊娠期から子育て期まで切れ目のない支援を行っている。また、未就学児童の預かり事業のほか、就学後も学校内での放課後事業を通じて子どもの居場所を提供しており、安心して子育てできる環境、子育てと仕事を両立するための支援体制が整備されている。

（移住支援）

上富良野町への移住を考えている方向けに、「お試し暮らし住宅」を一泊2,000円（冬期間は一泊2,500円）で提供。また、まちの移住ホームページには空き家・空き地情報を掲載しているほか、町内には二つの不動産業者があり、民間の賃貸アパートが相当数あるので、気軽に相談してほしい。